



人間の運命 第二部

第二卷・嵐のまえ

芹沢光治良

# 人間の運命

第二部 第二巻 嵐のまえ

昭和40年11月25日 印刷

昭和40年11月30日 発行

定価 400円

著 者 芹 沢 光 治 良

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株 式 新 潮 社  
会 社

東京都新宿区矢来町 71

振 替 東 京 8 0 8

電話東京(260)1111(代)

---

印刷・株式会社 金羊社 製本・神田加藤製本所

乱丁本はお取替いたします

© by K. Serizawa. Printed in Japan

# 人間の運命

—第二部—

第二卷 嵐のまえ



## 第一章

その年（一九三〇年）の日本の夏は、スイスの医者が懸念したように、胸をやむ森次郎には、こたえた。

じめついた梅雨がつづいて、からだ 軀を動かすのもたいぎで、少なくとも日に一時間半の散歩をするようにと、スイスの医者は処方箋に書いてくれたが、二階の縁側でデッキ椅子に仰臥しながら、雨脚に目をおいているだけで、たまに陽がさしても、隣家との境の椎の古木の梢の若葉に、雨露が光るのに驚きの目をおくぐらいで、階下へ降りて行く元氣も出なかった。週二回、大学の講義から帰ると、口もきけないほど疲れて寝ころんだまま、二階の縁側へ階段をのぼる氣力もなかった。熱はないのだが、しめった空氣が、肺臓にはいりにくいようで、目がはれぼったく、食欲がなかった。

雷さえ鳴れば、梅雨があけるからと、節子は年寄のようなことを言って、毎日空ばかり見上げていたが、はげしい雷雨の夕に、田中が同じ病氣で、大学病院で息をひきとった。

次郎は急を告げられて、自動車で駆けつけたが、田中は最後まで氣がたしかで、枕もとによ

ると、いつものように握手を求める力はなかったが、奥さんが、森さんですよと声をかけると、目を見ひらき、微かな声で言った。

「なあ、森……スイスへ行こうよ……早く、な」

「うん。もう一奮発、頑張れよ。梅雨さえあければ、元気になるからな」

田中が目を閉じたから、顔をのぞくようにして、言葉をのみこんだ。そばに若い奥さんと看護婦がいるだけで、親族であろう、幾人も廊下で何かを待っていた。スイスへ連れて行く約束で、おたがいなそれをたのしみにしたが、果せないで、死んでしまうのか——次郎は胸がつまった。尖がった顔に、もう死相も出て、荒い呼吸で、目を開けたが、視力も弱っているらしく、ベッドの毛布の上においた手で、次郎を探しているようだ。握ると、骨ばかりで熱っぽくて気味わるい触感であったが、喘ぐように、

「森、日本は息ができないな……ぼくは、日本が……好きだけれど……息ができない……いやなところだ」

「うん、外は雷が鳴っているよ。これで、梅雨があがるから、じきにらくになるよ。頑張るんだぞ——」

「雷か……ああ、早くうまれすぎたよ」

口をきくのが、無理であろう、苦しそうに胸が波立って、骨ばかりの顔に汗の粒が浮んだ。看護婦があわてて汗を拭いながら、酸素吸入をはじめたのをしおに、次郎は爪先だってベッドをはなれた。病室にいては、邪魔になるのだらう。廊下へ出たが、その時、硝子窓にびりびり

響くような雷鳴がしたので、窓ぎわにしばらくたたずんでいた。

大粒の雨が硝子窓に吹きかけて、外もよく見えなかったが、中庭の古い垂れ柳が通りすぎる風雨に、枝をふりみだし、その若葉をとぼして、幾葉も硝子にへばりついた。病室前の廊下のベンチや椅子に、不安そうに無言で控えていた人々のなから、若い人が近づいて、次郎の肩に手をおきながら、話しかけた。

「森次郎君ですね。岡です。田中君とはワシントンでいっしょでしたが。……彼が君と親しいとは知らなかった」

「一高の寮で同室でしたし、特別に親しくしていましたから——」

そう答えながら、岡が一高の二年先輩の英法で、全寮委員長をしたことを思い出した。大学に在学中に外交官試験に及第した秀才だと、噂を聞いたこともある。

「そうだってね。彼がここに入院してから、聞きました……君とスイスに行つて、丈夫になつて帰るのだと、喜んでいたが……日本の医学もまだだめかね。将来の外務大臣をむぎむぎ見殺しにするなんて——」

「医学だけではなくて……結核患者には、なにかも、日本は地獄のようなところでしょう。田中もアメリカかヨーロッパでよくして、帰国すればよかったのです——」

「こんな素晴らしい男は、何十年に一度生れるかわからないのに……手を拱こまねいて、その死ぬのを待っているなんて、腹が立ちますね」

「結核だからって、もう死ぬか、もう死ぬか、待たれる方が、もっと辛くて、くやしいでしょ



うね……今も言っていましたよ、日本は息ができなくて、いやなところだって——」

「そんなこと言っていましたか。そんな元気がありましたか。熱にうかされているのでしょうか……さつき、A博士も、もう時間の問題だって、それも、何分<sup>ぶん</sup>というような短い時間の問題だって——」

それで、皆深刻な表情をして、廊下の隅で待っているのだろうが、その人々の仲間になる気はしなかった。帰ることにしたが、岡が引きとめるつもりか、突然言い加えた。

「君のことは、ロンドンで石田君から聞いたよ。石田孝一君は君の中学校の同級生だって？」

「石田君は今、どこにいますか」

「知らないのか、シカゴの領事館だ……あの頃、ロンドンには東大のK先生が留学していて、よく石田君を誘って、お宿へおしかけて、お話をうかがったものだが……そうだ、K先生のところ、君のゲリブテ（恋人）にもお会いしたよ。綺麗な人だったが、先生も心配していた……君はあの人と結婚したの？」

一体何のためにこんなことを、言い出すのか、はかりかねて、次郎は答える代りに、窓硝子を手で拭って外を見た。雨脚はおちて、垂れ柳も枝を振っていないかった。

「ぼくは失礼します」

「なんだ、君はいてやらんのか……来たばかりで——」

「ええ、田中の死を待つなんて、とても……失礼します。田中は死にませんよ」

憤りを、やっと微笑にまぎらわして、先輩に礼を欠かないように、静かに廊下を歩み去っ

た。早く生れすぎたと、喘いだ田中の言葉を心にくりかえしながら——運よく病棟前にタクシーが停っていた。それに乗りこむなり、次郎は軀をなげ出すようにして目を閉じた。

あんなふうに親しい人々が集って、死を待つのが、日本の習俗であろうか。あんなに多くの人が集って、息を殺して凝視しては、眠ることもできないのではなからうか。スイスの高原療養所で、息を引きとった不幸な患者は、みな故郷からも家族からも離れて、独り静かに死神に委せて、夜半、病友たちにも気付かれないように、高原をおりて行った。自分も幾度も、その人々のように、死神に委せてみたが、死は悲しくも怖ろしくもなかった。まだ人生をよく識らないためか、闘病しながら、生きることの方が、辛くて、しんどく思われた。目の前に妻や子がいなかったから、心のこすこともなく、死神のあとを、夢のなかのように、どこへも従えそうな、のどかな気がした。田中の場合も、常時若い奥さんがつきまとい、胸のなかまでのぞきこむようにしていなければ、死といっても、あんなにも行こうと希っているスイスの高原へ、夢のなかで行くようになるのではなからうか。今になっては、それが、田中も安楽であろうし、奥さんも救われるであろうに、あの人々はただ涙を見せるために、集っているのだろうか。どうも、日本人の死の迎え方、死についての考え方は、西欧人とはちがっているのではなからうか、それは、また、生についての考え方が、ちがうからであろうか。それにしても、早く生れすぎたという田中の嘆きは、なんであったか——

次郎は家へもどって、夕餉の膳についてからも、同じことをぼんやり考えていた。

六畳の茶の間で、卓袱台をはさんで、妻と向きあい、黙って食欲もなく箸を動かしている自

分は、死んでいるのではなからうか。卓袱台の上にある鰯きしの焼物、きゅうりもみ、さといもの煮つけ、豆腐の味噌汁、枝豆、茶碗にもった白いご飯——みな、死者への供物であって、生きる力になる食糧ではない。食膳の横に、お盆を膝にしてつましく控える女中も、死者の供養につらなっている表情だ。バターのきいたポタージュ、魚のムニエル、ビフテキとじゃがいものプーレ、サラダ、果物とチーズにパンのようなものが、食卓に出て、おたがい愉しみあひながら食べてこそ、生きた人間の夕餉であつた。ぼく達も生きてゐるんだよ、生きるんだ、そう叫びたいことを、どんな言葉で話したら、妻に通ずるであらうか。妻はきょとんとした顔をして、生きてゐるではありませんかと、答えるだろう。死んだようなのは、あなたの肺病のせいですと、むきになるかも知れない……

こんな考えも梅雨時のせいであらうかと、ふと次郎は思ひなおした。ヨーロッパへ行く前には、日本に梅雨があることも氣にかけなかつた。梅雨も苦にならなかつた。それなのに、うつとうしく、息もたえるように、家中音もたてないで、何か不吉なことを待っているようなのは、どうしたわけか。自分がただ結核になつたばかりに、湿氣をふくんだ梅雨の空氣が、肺臓にはいらなからであらうか。体温計も赤線すれすれだ。一体、どうして肺結核のような業病になつたのか——けたたましい電話の音がして、やっと家中目がさめたようだ。

東大病院からだと言う。電話に出ると、田中の若い妻の声だ。

「森さんでございますか、主人はとうとういつてしまいました」

涙もふくまず、乾いた声である。

「いつですか」

「一時間ばかり前でしょうか……森さんには、一番先にお知らせしたかったものですから」

「田中はスイスに行ったんですよ、ね。だから、ぼくは病院へも、お宅へも、もう参りませんよ」

「はい、あんなに希っていたスイスでしたから……わたくしも、そう思うことにいたします」

それで、電話はおわたたが、次郎はこれでスイス行きも不可能になったと、全身から力がぬけたように、デッキ椅子に倒れていた。

雷鳴があつてもすぐには梅雨があけなかったが、ようやく青い空に陽が照り出して、前の古椎の梢から蟬がやかましく鳴いている朝、パリの大塚から、シベリア經由で手紙が届いた。もうマルセイユを発つて、インド洋にいる筈であつたが。

「森君、

日本の梅雨時は、君の健康にはどうであらうか。この手紙が着く頃は、梅雨ではなからうか。日本の植物に日本の風土が適するように、梅雨であっても、日本の風土が今までどおり、君を健康にしているように、祈っている。

マルセイユを出発する予定の数日前に、クララが急に疲労が出て、あわてて病院に入院した。それ故、予定の伏見丸に乗船することを見合わせた。疲労だから、病院で二週間も休養し

たらば、その頃東洋に向つてマルセイユを出帆するフランス船があるので、それで日本に帰ろうと、クララと話していた。船の上で休養ができるから、そうするようにと、医者もすすめるくらいで、安心してゐた。しかし、疲労だと考えられたクララの病気は、まだ原因がわからない。とても旅行など考えられないというので、日本への航海は不可能になった。クララは、ぼく独りで帰省するようにすすめるが——留守の間に、健康になるからと言うが、病気であるから、そばにおつて看護してやりたいと、思う。

そんなわけで、帰国の計画は中止することにした。それについて、君にお願いしたいのだが、きいてもらえないだろうか。

母が亡くなったために、父は将来のことを相談したいから、是非帰国するようにと、電報をうつて来た。心細くて、ぼくに会いたいのだろうが、今ぼくが日本へ行くことは、不可能であるから、父にフランスに来るように手紙を書いたところだ。父はすでに社長もやめて、隠居しているから、いつでも、自由に日本をはなれられると思う。年齢もまだ、海外旅行にはたえられる。先年、母でさえ独り来られたのだから、父も独りで来られると思うが、あれで父は案外臆病で面倒がりなので、独りで海外の旅に出るのをためらうのではないか、心配だ。それで、父にも書いておいたが、君がいつしよに来てくれたら、ありがたい。是非それをお願いする。

父から君にお頼みすると思うから、その時は、引受けてくれないか。調べてみたが、シベリア経由は早い、君や父には無理のようだ。インド洋まわりは暑くて時間がかかりすぎるから、アメリカ経由にした方が、早くて疲れないようだ。切符のこと、太平洋とアメリカ大陸と

大西洋の連絡のこと等、パリのトーマス・コック社と相談して、父の方に交渉したから、その点は安心してくれ給え。

クララが病気になる前に、ルイ・ジュウベに会った時、モリは日本へ着くなり、死んだのか、生きているしもくれないと、心配していたが、ぼく達が日本へ旅行すると話したところ、それなら日本から帰る時には、モリの首になわをつけて、ひっぱって来てくれ、なんて、笑っていた。彼は今も君を『日本の小さいフランス（王子）』と呼んで、なつかしがっている。君が小説を書き出したと告げたところ、フランス語で書くようにすすめるなんて、言っていた。君がパリに来たら、どんなに喜ぶか、彼は最近トーカーに新しく意欲をもやしているようだ。小説家のKさんは、君が日本からもういないから、飛行小説を書くんだと、一カ月ばかり前に、クララに話していたそうだ。

君の東京の生活が想像できないが、パリにもどれば、ここには、君が水を得て生きかえられるような文化環境が、小さくてもあって、そこで君は自己を発展させると同時に、その環境を拡張して行けるではなからうか、ちょうど、ぼくが今ここでしているように。そうしたら、昔一高の寮で、毎晩のように語った友情や理想の、ほんの僅かでも実現できるのではなからうか。それを思って、胸をあつくしながら、この手紙を書いている。

父から頼んで行くだろうが、引受けてくれ、頼む――

（以下略）

」

次郎は茫然としていた。暑氣と湿氣でぼんやりした頭脳に、大塚の言うことは、はっきりし

ているのに、通じないのだ。前年の秋のはじめ、フランスを出発する時には、妻と子を日本へ送りどけて、すぐにもどるようにと、大塚がすすめて、たしかに自分もそのつもりであった。すぐにもフランスへもどれるものと考えて、疑わないうで、マルセイユを発った。あれから八、九カ月しかたっていないが、大塚の思いやりや友情が響かないで、大塚の勝手な、思いあがった申し出のように感じられる。どういうわけか。日本に半年も居ついたために、フランスにもどるといふようなことが、実現不可能な妄想になってしまったのか。田中が闘病しながら、スイスの療養所へ行けるほど健康が回復したら、いっしょにヨーロッパへ行こうと、しきりに言っていた時には、自分も本気でその気になり、行をともしする計画であったのに、田中が亡くなつて、まだ数日しかたたないが、自分のこころのなかにも、なにかが死んだのであろうか。

「あの、お客様ですが……奥さまはお散歩に出かけられました——」

と、若い女中がデッキ椅子の頭の方に、当惑して立っていた。階下において玄関に出ると、暗い三和土に、田中の若い妻が黒の洋装で立っていた。血の気のない顔が、暗いなかによく浮いて見えた。上るようにすすめたが、抜け出すようにして来て、くるまを待たせているからと、小声で言いながら、紫色の風呂敷をといて、

「森さんに、これだけでも、おあずかり願いたくて、かくれて持つて参りましたの」

と、声をはずませた。古ノートを数冊束ねてあるが、異様なことに、細い針金で十字にからげである。穢わしいものだというように、次郎は不審でならなかった。

「これ、結婚してからの主人の日記ですの。田中の家では、主人のものは、なんでも、みんな

焼いてしまおうとして、知らない間に、こんな風に束にして……でも、わたくしには形見のような大事な記念品ですから、思い切つて、森さんをお願いに上りました」

「日記まで焼こうとするんですか」

「ええ、不吉な病気だからと言つて、何も彼も、田中のものは、焼いてしまつて……ええ、わたくしをも焼いてしまいたいようですが……生きていますから、それが、できないらしいですわ」

最後の言葉は聞きまちがえたのかと、次郎は驚いた。

「では、くるまが待つておりますから……森さんにはお礼も申上げないで……ごめん遊ばせ」おびえている様子で、玄関を出た。次郎は急いで下駄をつっかけて門まで送った。

「奥さんは、これから、どうなさるんです」

「わたくしもスイスへ行きたいと思つております」

「だめですよ、奥さん……田中の分も生きなければ」

「え、主人のような行き方で、スイスへ行くのではございません……わたくし、実家へもどるつもりですの。実家で落着いて、両親がゆるしましたら、今度は勉強に独りでロンドンへ行くつもりですの、独り生きられるように……もしたら、スイスへ行つてみます。実家で落着きましたら、お話をうかがいに寄せていただきます。それまで、あれを、おあずかり下さい」

「大切にあずかりますよ」

次郎はそれ以上、言葉が出なかった。涙も悲しみも、しぼりきつて、瘡せおとろえ、幽界か



らもどった若妻のように妖しかったからだ。

やっと小さな石門の前の狭い路に、大きな自家用のバックカードが方向転換をして停とどまった。運転手を意識したのか、黙って頭を下げたまま、それに乗ってすぐ見えなくなったが、日記をとり再び現れることはなく、このまま消えてしまい、そんな気がして、次郎はぼんやり見送っていた。

田中は富豪の息子で、オールマイティという渾名にあ応こたわしく、外交官試験も一番で及第したが、美男ではあり、健康そうで、将来を嘱望されていたから、若い妻は黄金の光に包まれて結婚したのであろう。実家きとと言ったが、どここの誰の令嬢か、名門の出であろう。次郎は田中が病気になる前から、病院であつたきりだが、いつも凛々しくて気品があつた。結婚して二年目に発病したそうだが、それから何カ月看護したか、小柄なからだに精根もつきて、生きた幽霊のようになつてしまった。わたくしをも焼いてしまいたいようですが、生きていますから、それができないですわ、とは、生きている若い妻には、あんなに静かに言えるはずのない言葉だ。それにしても、田中のものは何も彼も、日記まで焼かないではおかないとは、結核はそれほど忌み嫌う病気であらうか。西欧の人々が、これほど自然になおり易い病気はないと言っていたが、結核菌は湿度の高い日本の梅雨時から夏にかけて、激しく繁殖するために、不治のように怖れられるのだろうか――

次郎は梅雨になつてからの物憂さは、わが体内の結核菌が急速に活動し、繁殖した証拠のような気もして、自分はその忌むべき結核患者だと、はじめて気がついたように、節子や有田氏の側になつて、自分を省みて、身ぶるいを感じた。それと同時に、一つの考えが閃光のよう